

『無二』

自選五十句

佐怒賀正美

蟻の巢の迷路やここも自転中
 大花火首都は眼底さらしたる
 カレンダー裏の光沢虫すだく
 金色をひと刷け秋の木靴かな
 飛入りのやうに斜めに笑ひ茸
 アフリカの顎骨あたり飛ぶ二月
 星芒や砂漠をすべる春の蛇
 灼岩が立つマンデラの国の端
 仮面売る暑き砂漠に囲まれて
 カーニバル花火に椰子の影浮かぶ
 ココナツ水旨しボサノバ流す浜
 涼しさや入港審査官と朝餉なす
 ひかがみに銀座の微雨や猫の妻
 宇宙よりうねり立ちたる千歳藤
 空豆にアラオの眉の如きもの
 八束忌や磯ひよどりの三世さんぜごゑ
 核の世の海の獺なりあめふらし
 栗食うてぐだぐだ言うて嫁げさう
 天近き蜜柑に負けず蝶ひかる
 プルーストは籠り私はサンタする
 私はティッシュ微笑返しの聖夜
 初空やましら渡りは虚もつかみ
 白梅や髪なびかせて逃ぐる鬼
 宇宙地球草餅いびつ寧らけし

箱庭に幽霊の出る闇つくる
 新涼や詩書に仕上がる紙ロール
 眼球の奥のつながり水温む
 春めくや石庭に石生まれさう
 次の世の竹林明かり春時雨
 龍天に登り弾道見極めむ
 かげろふや肉体滲みだす巨石
 黄金週間そして産道抜けて世に
 ごきぶりの仮死より覚めて頼りきぬ
 涼しさや溺れかけつつ世に出づる
 句碑のぼる舟虫無我にして一気
 八方を愛でつつ星河下りかな
 蟄虫ちゅうちゅう坏戸虹の欠片は入れてある
 テノールの声の肉づく水の秋
 無二の世を落葉の孔あなの網目越し
 肉体の柱の見ゆるコートかな
 マフラーの長きが散らす宇宙塵
 もぞもぞと冬眠かさこそと万骨
 につぼんが雪のエクレア赤子そ添へ
 赤道を越ゆるにこぞ挙る鯨波かな
 聖獣悪魔バりに舞ふなり跳なる
 鯤こんほどに皇居より伸び花の雲
 銀河鉄道どの車窓にも桜餅
 聖五月眠るには小さな空でいい
 でて虫をちりばめ星空めく行路
 あめんぼの息に彩色してみたし